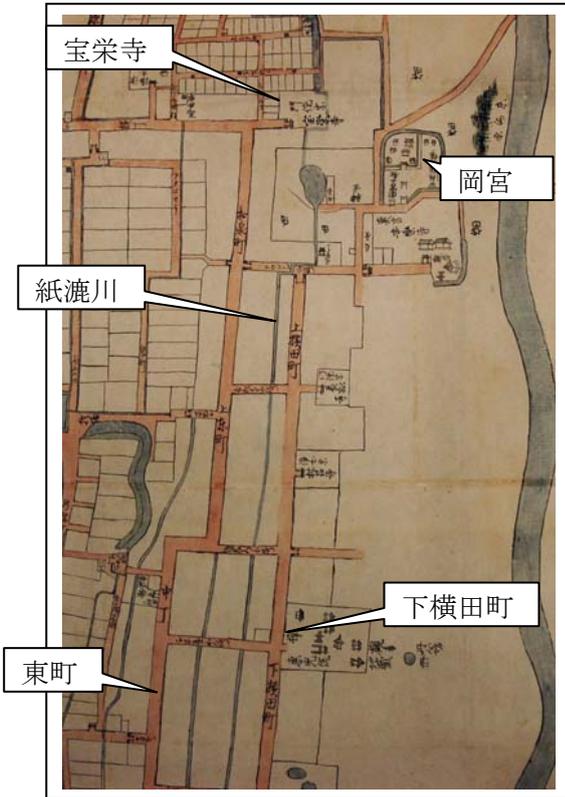


紙漉川^{かみすきかわ}という小河川があるのをご存知でしょうか。岡宮から東町の東裏を、ところどころに顔を出しながらひっそりと流れ下る小さい川です。しかしこの川の名は当時の重要な産業の一つ和紙生産の場がこの川沿いにあったことを伝えています。

1 紙漉川の流れ

紙漉川は、川北の城下を南北に流れ下る川の一つです。明治12年の「北深志町町内概況取調書」には、用水路の項に、市中の用水として使われている「紙漉屋川」がある、巾は4尺で長さは740間、勾配は100間に3尺である、水上は深志村で、街中にはいると井戸水が流れ込んでくる、また途中で堰へ分水もし、最後は女鳥羽川へ流れ込む、と記されています（『松本市史』第4巻旧市町村編I）



左図をみると、宝栄寺地を避けてぐるりと裏へ廻りこみ、岡宮神社^{おかのみや}の西にある池に入ります。池から出た水は、南へ流れて観音小路^{かんのんこうじ}へ出、少し西へ向いて流れたあと東町の東裏を南下し、作左衛門小路^{さくざゑもんこうじ}で二つに別れ、そのまま下横田町の西裏を南へ流れる川と東町の裏を流れる川となって、さらに南へ下っています。

その先は、山家小路^{やまべこうじ}の北で東から流れてきた川と合流し、西へ流れて、上土^{あげつち}の東で女鳥羽川へ落ちていきます。

この絵図が描いている文化5年から天保6年頃には、作左衛門小路で2流に分流しています。東町と下横田町の人々の生活用水として機能していましたし、東町の裏には農地もありましたのでそれにもつかわれていたかもしれません。

現在の状況を川筋に沿って歩いてみると、川筋の多くは家の裏になっています。所々見ることができる場所を追っていくと、女鳥羽川に流れ込むまでの流路を追うことができます。水量はかなり少なくなっていますが、石積みが見ることが出来ます。

「文化5年から天保6年頃松本城下絵」図部分

れていたりして川筋はしっかり残っており、かつては水量があって、生活水としてつかわれていたことをみることができます。

紙漉川は、東町と上横田町の裏を流れています。両町の境を流れているようです。東町と上下横田町が南北の通りとして設けられたときに、計画的に用水として引かれた小河川だったと思われます。



紙漉川の上流域



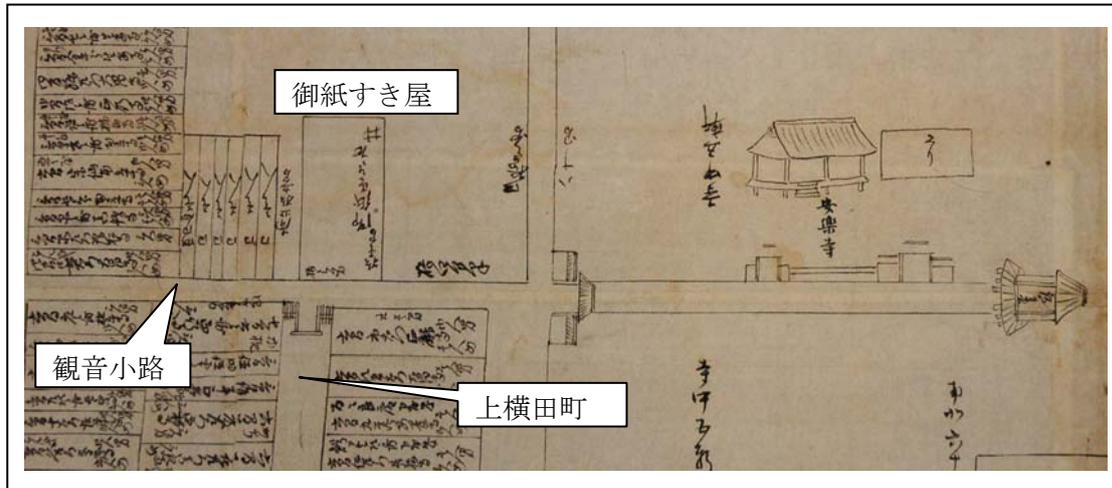
紙漉川の下流域



女鳥羽川へ注ぐ場所

2 紙漉屋

この用水の上流に注目してみましょう。下の「元禄期城下絵図」をみると、安楽寺に向かう観音小路の上横田町の入り口北側に「御紙すき屋」と記され、間口11間奥行き11間の敷地と井戸が描かれています。ここに御用紙を漉く紙漉場がありました。紙漉川という名は、和紙生産の場があったことからついた名であることがこれで確かめられます。



松本町の和紙生産は、岡宮で始まり後に清水へ移りました。清水の近辺には槻井泉神社の湧水など豊富な水があります。紙の需要増にもなつての移動と考えられています。その時期ははっきりしませんが、1659（万治2）年の桐原分の免状に清水紙漉屋敷の記事がみられるといわれていますので、江戸時代の早い時期に、清水でも紙漉きが行われていたようです。

1678（延宝6）年に、岡宮の御紙漉屋で余った楮こうぞを入札するので希望者は町会所へ来て入札するよという文書がありますし、それよりあとの元禄の絵図にも岡宮に紙漉き屋の記載があるところをみると、岡宮と清水と両方で紙漉きが行われていた時期もあったようです。

水野氏時代のことですが、藩で必要な紙を漉かせるために、御用紙漉を金右衛門、長右衛門、甚右衛門の3人に命じ、年貢として村方から出させた楮こうぞを使って紙漉きをさせ藩に納めさせました。その支払い勘定は翌年の暮にすると断言していますので、悠長な支払いでした。また、家中から注文があった場合は、その時の楮の値段によって変化する紙相場の値段で売るように指示をしています。

紙の値段について、享保10年に紙漉き業者から、楮相場は金1分に楮6貫800目であり、奉書は1束につき銀33匁（従来30匁）、上杉原は1束につき銀16匁5分（従来は金1分）、中杉原は金1分につき1束3状（1束5状）、広封は金1分に1束3状（1束6状）、封紙は金1分に2束（1束4状 注2束4状カ）を売値にしたいという願いが出されています。（『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第2巻歴史下）。

3 和紙の生産

和紙の原料は楮こうぞや三桮みつまたや雁皮がんぴという木ですが、これを葉が落ちた冬場に枝を刈り取って、一定の長さに切ったものを釜で蒸し、皮を剥ぎ干します（黒皮といった）。それを水に浸しながら黒い部分や節を取り除きます（白皮といった）。これを水や雪に晒しさらに木灰を加えて加熱して純粋な繊維だけにしていきます。つぎに繊維をより細くほぐすためたたくという作業をします。以上で紙を漉くための原料ができあがります。この原料を漉き舟に入れ漉きます。のちには漉くときにネリとしてトロロアオイ等を使い繊維を固めない方法を使いさらに漉き方も工夫した「流漉」という方法が主流になっていったといわれています。漉かれた紙は脱水のためにしぼられ、それを板にはって乾燥させると和紙ができあがります。この製造過程からみても、豊富な水が必要であることがわかります。

和紙には、さまざまな名前がついています。楮を原料にして奈良時代から使われている壇紙だんし、平安時代末に播磨国相原荘から始まり中世に贈り物としてさかんに用いられ江戸時代には大衆化した杉原紙すぎはらかみ（大きさによって大杉、中杉、小杉とも呼ばれた）、楮を原料として越前からはじまった高級な紙で江戸時代には公用紙としてつかわれた奉書ほうしょ、雁皮から作る紙で晒す前の色が鶏の卵のような淡黄色をしていることから名が付いた鳥の子トリノコ、使い古しの紙を漉きなおした宿紙しゆくし、ほかに美濃で漉かれた美濃紙みのかみ、障子に貼られる障子紙、薄紙厚紙といった厚さを示すもの等、紙質や産地や用途や

形状などによってつけられた数々の名称があります。

紙の取引の単位は丸と束が使われ、紙の種類によって枚数が異なっていたといいます。奉書の場合は1束48枚で8束が1丸でした。ほかに締や帖（半紙の場合は1締が10束、これは200帖で2000枚）という数え方もありました。

以上の簡単な知識をもとに、前述の享保10年の紙漉業者からだされた願いをみると、松本では、楮から作る奉書や杉原紙等が漉かれていました。紙の値段では奉書が一番高値で、杉原紙はそのほぼ半値、封紙が一番安値でした。

年貢として集めた楮を使って漉いた紙を藩庁へ納めた記録文書によって、1760（宝暦10）年1年間の月ごとにどのような紙が納められていたかを集計したものが下表です（『長野県史』近世史料編第5巻（3））。中折（^{なかおれ}松本の御用中折紙は奉書・杉原より小ぶりで紙色がやや黄色の紙）が突出して多く納められています。

月	奉書	杉原	目録紙	中折	広封	御判紙
2		2	4	13		
3		1		7		
4	4	3	1	1	2	
6	5	3	1	16		
7	1	2		17		
8	1	3	2	14		
10		1		17		1束1帖
11	4	4	5	15		
12		4	2	21	1	
合計	15	23	15	121	3	1束1帖

紙は、松本の町内だけでなく、村でも漉かれていました。藩では清水の紙庄屋（瀬川・穂刈・降旗の各家）と松川組の松川（北安曇郡松川村）の2ヶ所を紙漉船元として定め、御用の紙を漉かせました。年貢として出さない楮は売買が自由でしたので、それをつかった紙漉が村々でも行われていました。なかでも^{あいだ}会田・^{おみ}麻績組では盛んに行われました。

（単位は束）

4 そのほかの産業

豊富な水を利用した産業の一つに染色があります。^{こんや}紺屋と呼ばれる仕事で、^{あい}藍を使って木綿を染めました。1669（寛文9）年には、飯田町8軒、小池町7軒、和泉町5軒など26軒が数えられています。30年後の1696（元禄9）年には39軒に増えています。^{しほりぞめ}絞り染め以外の紺屋営業をするには紺屋株の所有が必要であり、藩では町内の有力な紺屋を紺屋頭に命じ、城下や在村の紺屋を取りまとめさせています。

越中方面から木綿を仕入れて、漂白したのち絞り木綿に染めて反物や手ぬぐい地にして売ることが文政期ころから盛んにおこなわれるようになりました。^{うずはし}埋橋あたりで木綿の晒しが盛んにおこなわれたといいます（『よみがえる城下町・松本』）。絞り木綿や手ぬぐい地の販路は京都・名古屋方面でした。この取引商人は「立山講」という講をつくりましたが、文政年間には構成員が78人いました。

また、絹織物を呉服といい、綿織物や麻織物を^{ふともの}太物といいますが、それを扱う商人も天保2年には呉服太物問屋をおおせつかる者がで、天保5年には絞り木綿問屋の制度も始められ運上金を納めて営業しました。呉服太物問屋は紺屋と契約を結んで、同業者以外の生産を行わないようにし、生産を厳しく管理して品質の向上に努めたため評判をよび、販路を伸ばしました。紺屋による布団地の生産も多かったといいます。

天保年間に足袋底をおる機織機が発明されて木綿の太い糸を使った厚い足袋裏がつくられるようになると、松本は足袋の生産地になり明治まで続きます（『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第2巻歴史下）。

5 城下各町の特徴的な商工業

『松本市史』上巻に、享和元（1801）年の調べとして、城下各町の特徴的な商家の扱い品や職人の職種が書き上げられています。

本町：諸問屋　　中町：呉服・酒造　　東町：旅籠屋・檜物細工　　博労町：馬市
伊勢町：鍛冶　　飯田町並鍋屋小路：鍋屋　　小池町：紺屋・桶屋　　宮村町：腰物細工師
和泉町：畳屋　　安原町：伯楽　　一ツ橋並新小路：魚・鳥・青物　　生安寺小路：豆腐・雑店
裏小路：鮫　　鍛冶町：石工　　庄内並清水：紙　　横田町餅差町その他枝町裏町：諸職工

これらはその職種の人々が比較的多くその町にいたということですが、生安寺小路（今の高砂町通）の雑店のように、現在につながるところもあって、興味がひかれます。